イスラエル考古学研究会
ニュースレター
No. 9
2010年2月

2009年度
エン・ゲヴ発掘報告

間舎　裕生

今年度、杉本智俊慶應義塾大学教授を中心とした調査団がガリラヤ湖東岸に位置するエン・ゲヴ遺跡の調査を行った。調査期間は2009年8月3日～27日である。調査区はアクロポリスの南側の斜面をG地区、アクロポリス北西端のテル最頂部をH地区として計2地区を設定した（図1）。グリッドシステムに関しては日本聖書考古学調査団が作成したものを使用した。

1．G地区（図2）

G地区からは大きく分けて3つの遺構が出土した。まずL-17からは、グリッドを東西に走る壁が検出された。この壁はテラ・ピゼの上部構造を持ち、更にそれの南北両面を漆喰で覆うものであった。また、基礎部分は3段程度の石組みで、最下段のみ南に石一列分張り出して造られていたことが明らかになった。この壁の幅は約150 cmであり、テル東端から出土しているケースメート式城壁の幅とほぼ等しいものである。このことから、城壁がアクロポリスの周囲を矩形に囲っていた可能性がある。

L-17の南側からは石のように硬化した1枚の巨大なレンガ敷きが出土した。レンガ敷きの標高は城壁の石組み最上段の標高とほぼ等しいものである。このため、両者は同一の床面を形成していたと考えられる。このレンガ敷きの直上からは復元可能な土器が多数出土した。

L-17の壁の連続と考えられる壁はM-17でも検出されている。ただしこちらは火で破壊されたためか、グリッド中央部分が大きく抉られていた上、融けた漆喰や焼けたレンガが堆積しており、L-17のような下層の構造は確認できなかった。後の時代の居住の跡が確認できなかったことから、これは最終的な破壊の痕跡と考えられる。

次にM-18からは3つの壁で矩形に囲まれた建物が検出された。内部は更に2つの部屋と用途不明の遺構に分けられ、それぞれの床は漆喰で覆われている。この建物は共伴する土器からヘレニズム時代のものと考えられるが、未だ調査区が小さいこともあり、現時点でそれ以上の言及はできない。ただし、

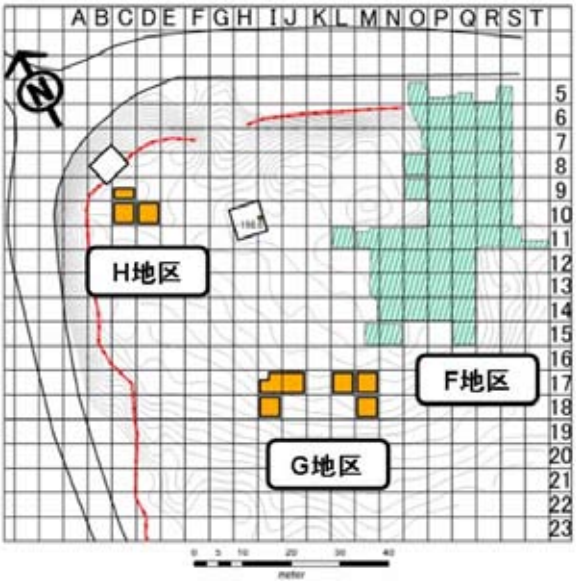


図1　2009年度の調査区

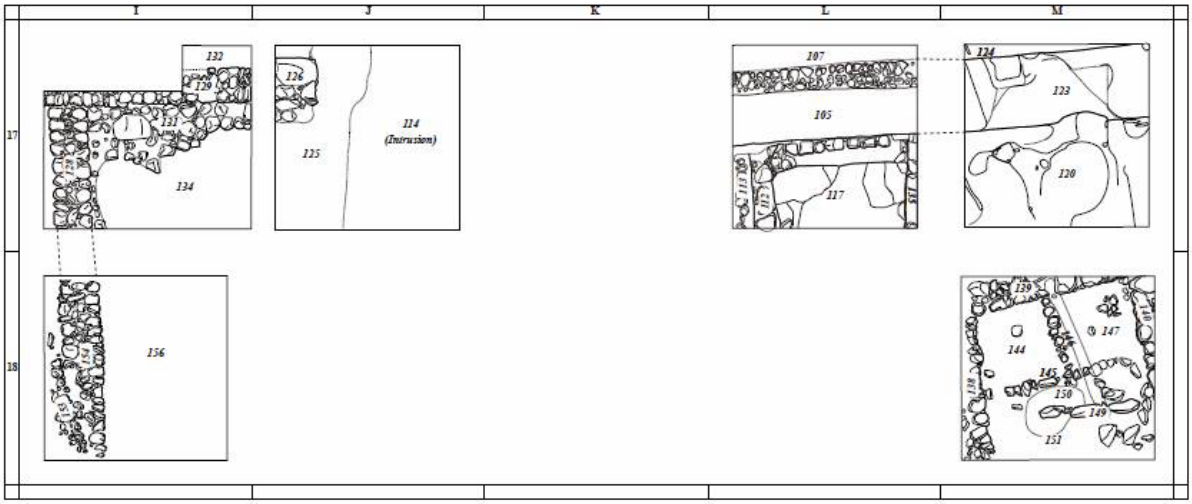


図２　G地区

後述のＨ地区の遺構と共に、ヘレニズム時代のエン・ゲヴに、今までの調査で確認されていた以上に堅固な建物があったことが明らかになった。

Ｉ-17、Ｉ-18、Ｊ-17の３グリッドからは東西方向の壁と南北方向の壁が矩形に交わった遺構が検出された。この２つの壁は工法が異なるため、両者が同一の建物を形成していたのかはわからない。出土土器は鉄器時代のものとヘレニズム時代のものが混合したものである。しかし、遺構が地表に近いことや、現代の人為的攪乱によって遺構が破壊されていることなどから、これ以上の解釈は困難である。

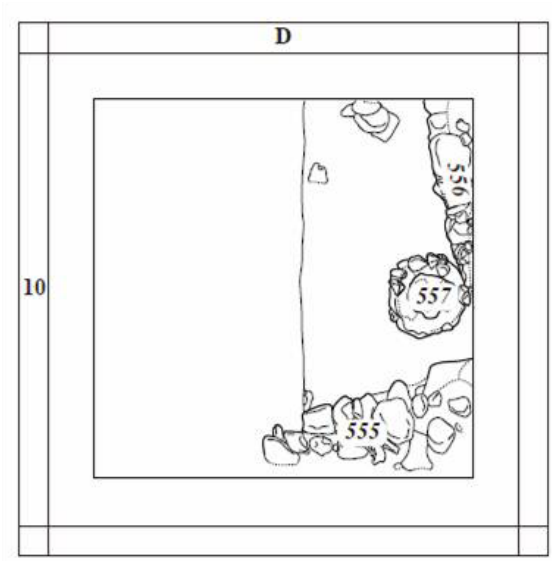


図３　Ｈ地区

２．Ｈ地区

Ｈ地区はＣ-9、Ｃ-10、Ｄ-10の３グリッドにおいて調査が行われた結果、３つの層が確認された。

〈第１層〉――Ｃ-９とＣ-10において矩形の遺構の一部が検出された。石組みは１段しかなく、遺構に取り付く床面も確認できなかったが、共伴する土器からヘレニズム時代と考えられる。遺構の位置から考えて、テルの最頂部に建っていた塔である可能性もある。

Ｄ-10からも矩形の遺構が検出された。出土した標高や工法はＣ-９・Ｃ-10のものとほぼ等しい。しかし、Ｄ-10の遺構の西側はＣ-９・Ｃ-10の遺構によって切られており、両者が同時期のものであるとは考えられない。ただし、２つの遺構の東西の壁が平行であることや標高が等しいことから、両者が元来は同一の建物を形成していた可能性は残る。

〈第２層〉――ヘレニズム時代の遺構の下にはピットや墓による攪乱が90 cmほど続いた後、Ｃ-10、Ｄ-10両グリッドのほぼ全面を覆う漆喰の床が検出された。この床は厚さが５～10cmある上質のものである。その下からは床の基礎を造るために人為的に盛られたであろう、砂利を大量に含む土の層も確認された。グリッドの断面からは、少なくとも３層の漆喰の床の存在が確認できた。これらの床は出土土器から鉄器時代ⅡＢ期（紀元前９～８世紀）

のものであると考えられる。これほど大規模かつ上質の漆喰の床はアクロポリスの大型の建物に取り付くものである可能性があるが、この２グリッドのみからその性格を断定することはできない。

〈第３層〉――調査時間の関係からＤ-10の東半分のみをさらに掘り下げたところ、２つの壁と炉が検出された（図3）。２つの壁は工法や上面の標高は同じだが、両者の交わる角は確認できておらず、基礎最下部の標高は異なる。炉は石で組まれた頑丈なもので、一般的な「タブン」に比べると上質なものである。これらは出土土器から鉄器時代Ⅱ Ａ期（紀元前10～９世紀）のものであると考えられる。

３．まとめ

今回の調査結果をまとめると次のようになる。①東西方向の壁が出土したことで、エン・ゲヴのアクロポリスが矩形に囲まれていた可能性が確認できた。また、壁の詳細な構造が明らかになった。②鉄器時代のアクロポリスにおいて、時期の違いによって、炉を伴う建物と漆喰の床（を伴う建物）という全く性格の異なる遺構が存在することが明らかになった。③これまで判明していた以上に堅固なヘレニズム時代の遺構が確認できた。

来期はＧ地区は北へ、Ｈ地区は南へと調査区を拡大する予定である。なお、調査結果のより詳細な情報は年次報告として次号の『史学』に掲載される予定であるので、そちらを参照されたい。

参考文献

杉本智俊／間舎裕生「2009年度エン・ゲヴ遺跡発掘調査報告」『史学』（慶應義塾大学）次号。

月本昭男／長谷川修一／小野塚拓造（編）『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告 1998-2004 ――』リトン 2009年。

Mazar, B., A. Biran, M. Dothan and I. Dunayevski, “Ein Gev Excavations in 1961,” *Israel Exploration Journal* 14, 1964, 1-33.

(慶應義塾大学大学院博士課程)

israelarchaeologyisraelarchaeologyisraelarchaeologyisraelarchaeologyisraelarchaeologyisraelarchaeologyisraelarchaeology

エン・ゲヴ遺跡保存公園計画

～調査結果と設計提案（2009年夏）～

河合雄介・大村麻理枝・松原弘典

はじめに

慶應義塾大学ＳＦＣ松原弘典研究室では、イスラエル、エン・ゲヴ遺跡保存計画の為、調査と初期設計提案を2009年8月1-27日の４週間で現地にて行い、帰国後フィードバックをもとに日本で設計提案を深化させた。この結果は慶應義塾大学ＳＦＣ研究所主催のＯＲＦ（Open Research Forum／六本木アカデミーヒルズ40にて11月23-24日開催）において学内外に広く公開された。以上の結果、今年度の活動報告は「現地調査結果」「設計提案」「来年度

の活動目標と準備」の３つからなる。

現地調査結果

イスラエル北部、聖書の舞台ともなったガリラヤ湖の東岸部にキブツ・エン・ゲヴがある。テルと呼ばれる小高い丘で発掘調査が行われた。我々はそのテルと周辺を含む敷地と、キブツの観光ルートとなっている範囲の調査を行った。特に以下の10項目を重点的に調査し、Ａ３のヴィジュアルシートとしてまとめた。（１）キブツ全体の観光資源（２）植生／樹種（３）　地表面（４）交通動線（５）建築物（６）等高線／敷地形状、範囲（７）戦争遺物（８）構築物１〔ベンチ、テーブル等〕（９）構築物２〔街灯、標識、看板等〕（10）本計画に活用する可能性のある建築物の実測。

例えば（１）「キブツ全体の観光資源」の調査では、テルを中心に観光客の動線上に多くの戦争遺物が残されていることが分かった。この戦争遺物をはじめとする多くの観光資源を繋ぐようにトロッコ列車が観光コースを走っており、その一つとしてこのエン・ゲヴ遺跡も重要な役割を担っている（図１）。

設計提案

2009年８月20日、キブツの重役達とのミーティングが行われた。現地で作成した第１次設計提案をプレゼンテーションし、今後の方針や活動、提案可能な事実の整理と確認をした。帰国後、フィードバックを元に提案内容の深化や図面修正を行った。提案の具体的な内容は以下の８項目をテル内（一部付近）に建設、修景しようとするものである。来年度、特に実現の可能性の高いものはＣ、Ｅ、Ｆ、Ｇである（図２）。

Ｃ　築山を盛った自然素材の展望台の設置

周囲で簡単に手に入る土を用いて地面に高低差を

図１

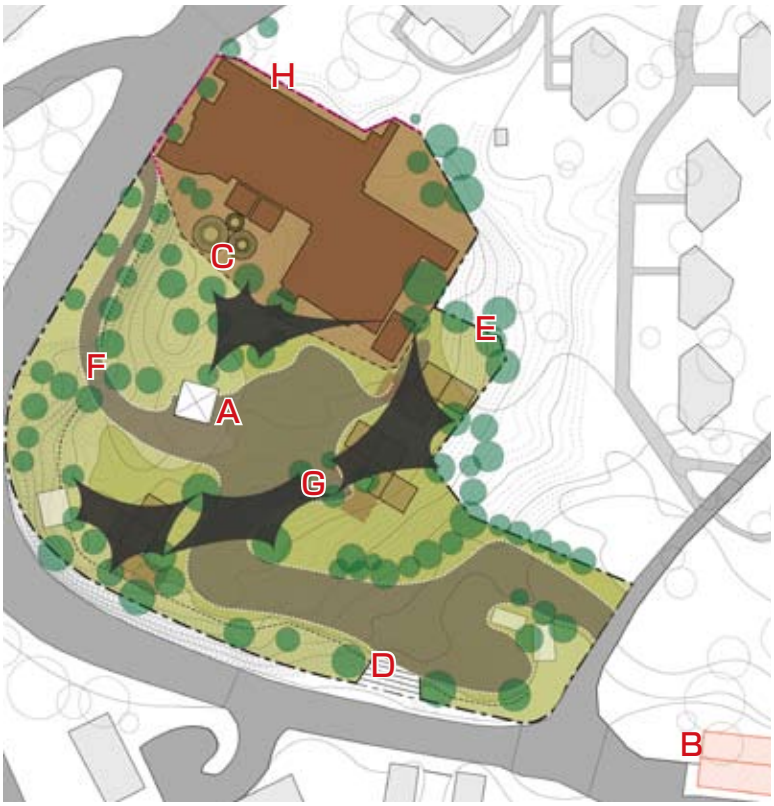


図2
A 戦争見張り小屋の階段取り付け／B ビジターセンター改装／C 築山を盛った自然素材の展望台の設置／D テル・エントランスのエントランス拡張／E 植物による住宅側との境界線の設置／F 現場の石で縁取る見学ルートの設置／G 簡易的なテント屋根設置による日陰のルートの設置／H 遺跡と住宅部分、道路部分との間にフェンスを設置（2009 年夏竣工済み）〔茶色の部分が発掘調査区〕

つくり、遺跡発掘現場を見下ろすような場所をつくろうとするもの。土を盛って３つの小さな山を築き、その間にウッドデッキを渡した展望台を作る。大きな山には登りやすいようにスリット状の階段を設ける。ウッドデッキの下や築山の重なりで生まれるくぼんだ場所にはこどもたちが集まって遊んでもらうことも想定している。山の裾にはこどもたちを見守る憩いのベンチも提案している。

E　植物による住宅側との境界線の設置

わずかに土を盛り、花を植えることで、住宅側と発掘調査可能範囲の境界線を示そうとするもの。不特定多数の参観者が住宅側のエリアに入ってくるのを視覚的に防止することに加えて、発掘範囲の無秩序な拡大を心配する周辺住民の不安を和らげる効果も期待されている。発掘調査のグリッド拡張にも臨機応変に対応出来る自然素材の境界線を提案している。すなわち石、土、花、低木、などこの土地で慣習的に見られる自然の物質を組み合わせた道路縁石のようなものである。また植栽活動をキブツ住民と日本側が協働して行うことで、共に公園を作っていく意識を高めることも想定している（図３）。

F　現場の石で縁取る見学ルートの設置

発掘現場から出てきた石で、トロッコルートの両端及びグリッドや戦争時の遺物を囲うように配置し

図3

図４

ていくことで見学ルートを示そうとするもの。調査区が変更になっても移動や排除の対応が可能な境界線の示し方を提案している。

Ｇ　テント屋根設置による日陰のルートの設置

発掘調査でも使用した、農業用の黒いメッシュのテントを樹々の間に張り、日陰の場所を作ろうとするもの。影を辿っていくことで、日を除けながら遺跡現場の見学を導くことを提案している。

来年度の活動目標と準備

2009 年の杉本隊長の現地訪問で上記の設計提案はキブツ側に紹介される予定である。このフィードバックを得て、2010 年度の夏までに以下の２つを実現するべく準備を進めていく。

ひとつ目は設計提案Ｃ「築山デッキ」の施工の現実性の検討である。この提案は（１）出来るだけ材料を低予算で抑えること、（２）遺構を傷つけないよう、コンクリートや鉄骨の基礎を用いないこと、（３）テル内には建築物を構築してはいけないこと、という３つの条件、制約を全て満たしていると考えられ、来年度の夏に現地での実施が可能ではないかと期待している。夏までに、キブツ側と交渉し、了承を得ることができれば、テルに自然の素材を用いた築山による展望台を作りたい。この実現に向け、既に初期段階の平面図、断面図と模型や三次元モデリングによる検討を開始している（図４）。

２つ目は、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇなどの見学ルートに関する４つの提案の実現性の検討である。Ｅ、Ｆともに地元の住民や子供らとともに、体験型のワークショップを通じて植栽、石置き活動を行うことができれば、比較的容易に境界線を作ることができると考えている。Ｆについては発掘調査グリッドがどのように拡張しても対応出来るようなリアルタイムのデザインとして来年度の夏に発掘調査と平行して施工を行うことを考えている。Ｇは実際に発掘調査でも用いている農業テントを張ることで、より効果的な日陰空間の提供を考えてみたい。

松原弘典研究室としては、発掘調査が全て終了した後に行われる公園整備計画だけでなく、発掘調査と同時進行しながら、作業中の光景や発掘されたばかりの遺構を見せる見学ルートや場所を提案することに、本設計提案の大きな意義を見出しつつある。静的で変化のない遺跡保存方法から、動的でリアルタイムに変化していくような、軽やかで現代的な遺跡保存方法の提案を模索して行ければと思う。

河合雄介（慶應義塾大学ＳＦＣ政策メディア研究科修士課程）
大村麻理枝（同大学環境情報学部）
松原弘典（同大学総合政策学部准教授）

【第 12 回イスラエル考古学研究会発表要旨】

エン・ゲヴ

ペルシャ時代からヘレニズム時代の考え方

牧野　久実

パレスチナにおけるペルシャ時代～ヘレニズム時代を考古学的にどのように扱うかは遺跡によって異なる。ペルシャ支配下のシリア・パレスチナではユダの地がイェフドという比較的自立性の高い属州となるが、その範囲はやはりごく狭い範囲に限られていた。また、ヘレニズム時代については通常前期はプトレマイオス朝、後期はセレウコス朝、もしくはハスモン朝時代として位置づけるが、南部ではイェルサレムやゲゼルのように後期ヘレニズム時代をハスモン朝とし、ドールやテル・ミハルといった沿岸部の遺跡では後期ヘレニズム時代とは別にハスモン朝時代を分類している。またベト･サイーダやテル･アナファといったキネレト湖周辺の遺跡では前期、後期、またはハスモン朝と区別せず一括してヘレニズム時代としている。基本的にはコインや壺の把手に記された文字などで詳細な年代や統治者の名前が判明している場合や、マカベア書やフラヴィウス・ヨセフスの記述などに記された特定の破壊跡などが見られる場合には詳細な時代区分が設定される傾向にある。しかし、そうした場合でさえ資料と史料が必ずしも合致しないことを、例えばシェケム〔シケム〕を発掘したN・ラップは指摘している。このように政治史と物質文化の時代区分は必ずしも一致しないという点に注意しておかねばならない。

実際、エン・ゲヴ遺跡においてはペルシャ時代～ヘレニズム時代にいくつかの層が検出されている。本稿ではその日本隊による発見の経緯と解釈について記す。

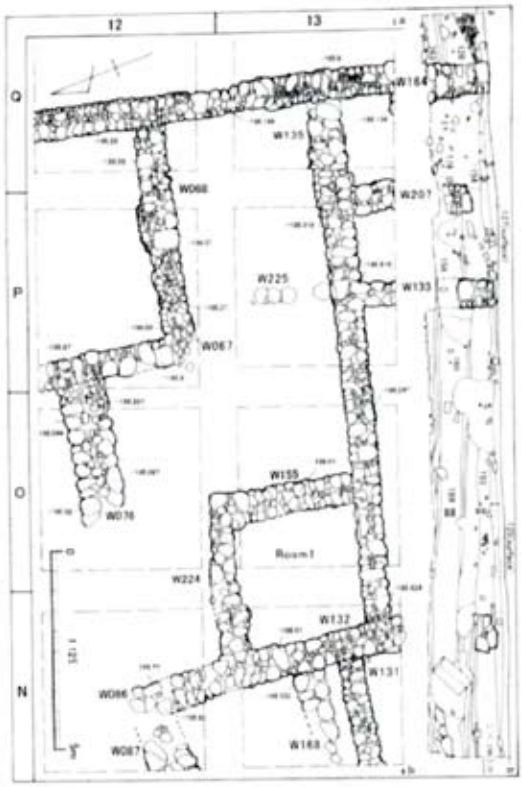
1961 年にB・マザール、A・ビラン、M・ドタン、I・ドナイェフスキーによって短期の発掘が行われた際、鉄器時代第 II 期を中心に、ペルシャ時代、ヘレニズム時代、そしてわずかにローマ時代の遺物も出土したことが報告されている。当時はペルシャ時代～ヘレニズム時代については鉄器時代に比べて出土物が少なかったということで、詳細な報告はされていない。ただ、現在は残っていないが 19 世紀に描かれたエン・ゲヴに残る古代の要塞らしき建築物について、ビランらはテル最上部で採集された土器片がヘレニズム時代のものであったことから、この建物もヘレニズム時代（紀元前３～２世紀）のものであるだろうと記している。また、エン・ゲヴから東へ 350 m上ったところにあるヒッポス・スシータ遺跡との関連性も示し、ヒッポス・スシータがヘレニズム時代に繁栄したためにエン・ゲヴが小さな港町として小規模化したのだろうと考えた。またその後この町が放棄された理由についても、紀元前１世紀初めにヒッポス・スシータがハスモン王朝のアレクサンダー・ヤンナイによって捕らえられたことと関連する可能性を示唆している。

日本隊によって最初の組織的発掘調査が行われた 1990 年～ 1992 年にペルシャ時代の土坑が１基とヘレニズム時代の層が検出された。ヘレニズム時代については１つの層とみなされた。しかし、調査終了後に山内紀嗣氏、桑原久男氏、日野宏氏の協力のもとにいくつかの調査地区のセクション図面を詳細に観察した結果、N-Q13 区の南側セクションにおいてヘレニズム時代の２つの床面が、また N11-14 区の西側セクションにおいて鉄器時代からローマ時代で少なくとも５つの床面が検出されていることが明らかとなった。N-Q13 区の南側セクションではヘレニズム時代に相当する床面が少なくとも２つあり、それらの絶対高がほぼ 196.5 m と 196.9 m であることが判明した（図１。文中の高さを示す数値はいずれも海面下。以下、同じ）。また同じ頃、筆者

はテル・アヴィヴ大学に保管されていたヘレニズム時代の土器片を同大学のM・フィッシャー博士の協力を得ながら観察する機会を得たが、その結果前期ヘレニズム時代のものが相当数含まれている可能性が浮上した。

当時、パレスチナにおけるペルシャ時代と前期ヘレニズム時代の実態についてはようやく注目され始めたばかりであった。以前は考古学上の暗黒の時代として捉えられた時代であり、発見された遺跡数も限られていた。しかし、新たな遺跡調査はもとより各遺跡の調査結果を再検討されるにつれて、パレスチナにおいても２つの遺跡分布圏が見られることがわかってきた。１つは地中海沿岸部、もう１つはキネレト湖〔ガリラヤ湖〕周辺である。同時に、これらの遺跡においては以前には認識されていなかった前期ヘレニズム時代と後期ヘレニズム時代を分ける試みが行われた。例えば、地中海沿岸部ではドールやテル・ミハル、キネレト湖周辺ではテル・アナファなどである。これらの遺跡ではヘレニズム時代を細分化するために出土物を層ごとに分類するよう注意が払われていた。このような中、上述のようにエン・ゲヴにおいても複数のヘレニズム時代の床面と前期ヘレニズム時代の遺物が確認された。

そこで、ヘレニズム時代の層で撹乱が少ないN14区とその周辺を図面から観察し、複数ある床面の高さを計測したうえで遺物を層ごとに分けるように試みた（図２）。その結果、196.9 mで土床が、196.5 mで漆喰床が、また195.9 mで土床が検出されており、最初の土床の上部からは鉄器～前期ヘレニズム時代の遺物が出土していることがわかった。次の漆喰床（L252）の上からはマイナスで処理されているものの恐らくは後期ヘレニズム時代と思われる遺物がしている。また、その上の土床（L233）の上からは後期ヘレニズム時代とローマ時代の遺物が含まれていることが判明した。前期と後期の区別は層毎の分類がすでに行われていたテル・ミハルからの



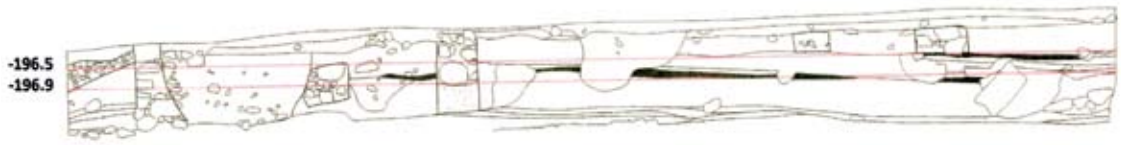


図１　ヘレニズム時代の２つの床面

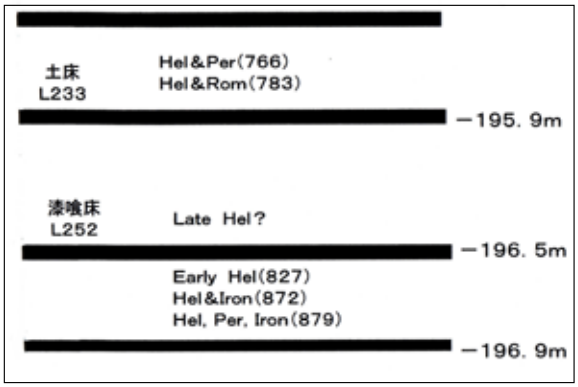


図２　N14 区の部屋の様子（括弧内はバスケット番号）

出土物を参考に行った。具体的には、碗の場合、前期のものは胴部が丸みを帯びているのに対し後期のものはＶ字形が主流となる。また、フィッシュ・プレートと呼ばれる皿は、口縁部の端部が後期のものほど下方へ大きく垂れ下がる。さらに、オイルランプの模様は後期のものほどパターン化された線模様など単純化する。

これらの調査結果をふまえ、1998 年～ 1999 年の調査時にはスーパーバイザーの宮崎修二氏に、撹乱が少ない O13-14 区の２つの部屋（最終報告書で部屋 17、18 とされる）についてできるだけ詳細に遺物を層ごとに分類するよう依頼した。その結果、部屋 18 では下層の床面（L171）上部のローカス L149, 142 に前期ヘレニズム時代の遺物を含んでいることがわかった（図３）。なお、この上部では上層の床面 L126 が検出されている。また、部屋 17 では下層の床面（L175）上部のローカス L139 にやはり前期ヘレニズム時代の遺物を含んでいることがわかった。なお、この上部では上層の床面 L125 が検出されている。なお、L139 の遺物は複数のバスケットに分類されているが、少なくともテル・ミハルからの出土物と比較した限りバスケット番号 414 を境に前期と後期に分けられる可能性がある。

上層と下層を区分する１つの目安となる数値（196.5 m と 196.9 m）については他の遺構にも見ることができる。例えば、P7-8 区で東西に走る石壁、Q11-14 区で南北に連続する石壁、発掘調査報告には記載されていないが T11 区で南北に走る石壁では、それぞれ１か所で石積の境目を見ることができ、さらに Q11-14 区の石壁に見られる境目の高さは 196.9 m である。Q14 区では 196.96 m の地点の床面に炉の底が、196.62 m の地点で炉の上面となるように設けられている。この他にも Q12 区で検出したロードス壺を再利用したような遺構や 2004 年までの調査において M15 区で検出された扉の軸受けらしき遺構といった床面と関連すると思われる遺構の高さの数値にも留意するとより詳細な状況が明らかにされるだろう。

一方、ペルシャ時代で明らかな遺構は他の遺跡でもこの時代に典型的と言われる土坑（ペルシャン・ピット）である。発掘初年度には O13 区から、2004 年には N15 区からと合計２基が検出されている。このうち、O13 から出土したものについては上層（L171）と下層（L176）に分けることができるが出土物の多くは下層から出土しており、その中にはフェニキア式の交易壺が含まれていた。N15 区の土坑については層に関する情報が明らかにされていないが、O13 区の検出例と同様にフェニキア式の交易壺が含まれていたことを山内氏は報告している。これらの土坑の機能については一般的にいくつかの解釈（貯蔵穴説、ごみ穴説、堆肥穴説）があるが、エン・ゲヴの出土例に関しては土壌の化学的分析は行われていないのでどのような役割をもっていたかは不明である。なお、ペルシャ時代の遺物はこれら

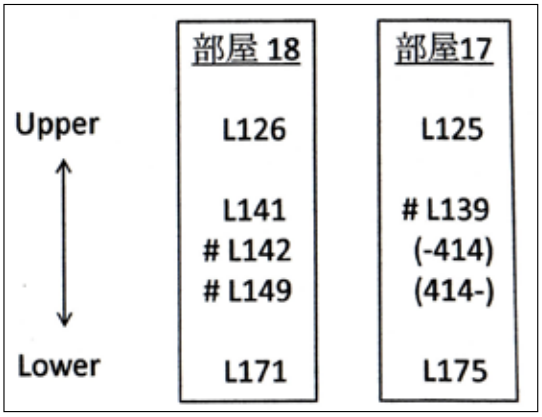


図３　部屋１，部屋２からの出土物
（# 付きバスケット番号は前期のものを含む）

の土坑だけではなく遺跡全体に散在する様子が見られるため、ペルシャ～ヘレニズム時代において遺構が重複していた可能性も捨てきれない。

以上のように、エン・ゲヴでは少なくとも一部の調査地区においてペルシャ時代～ヘレニズム時代を細分化することが可能である。また、文字史料の研究によってこれを検証することが可能であり、長谷川修一氏が現在行いつつあるロードス壷の把手の刻印の解読と年代に関する調査が重要な意味を持つ。当時のガリラヤがどのような行政区分に属していたのかという点についてはいくつかの見解があるが、特にＡ・ベルリンはケデシュの発掘結果から紀元前３世紀頃までにおけるフェニキアによる統治の可能性を指摘している。また文献からは紀元前 104 年にハスモン王朝のアリストブロス１世がガリラヤの北方まで遠征し、強制的に再ユダヤ教化を行ったことが知られている。ガリラヤにおけるこうした文化的変容について明らかにするためにも物質文化のさらなる詳細な解明が必要であり、エン・ゲヴもその一端を担うに違いない。

聖書時代を専門とする考古学者にとってペルシャ時代以後の層は最大の関心事である鉄器時代の上に積み重なる厄介な存在と捉えられがちである。また、文献史学者にとっては古典時代の研究は政治史中心のものであり、考古学的に明らかにされる物質文化は真面目な研究対象として取り扱われてこなかったかもしれない。従ってこうした古典時代の考古学的研究は鉄器時代までの研究に比べると立ち遅れてきたと言わざるを得ない。こうした中、2009 年 11 月 18 日～ 21 日に米国ルイジアナ州ニューオリンズにて開催されたＡＳＯＲの定例学会ではケルベト・ケイヤファ（Y. Garfinkel, The Hebrew University of Jerusalem）やテル・イトン（A. Faust, Bar-Ilan University）といったこれらの時代と関連する発掘報告や研究成果が相当数含まれていた。このように、古典時代のパレスチナについては今後も新たな発見と研究の進展が期待される。杉本智俊先生による再発掘の成果も加わりつつ、エン・ゲヴもこうした動向に重要な資料を提供するに違いない。

（鎌倉女子大学教育学部 准教授）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

【「パブリック考古学」への視線】

Ｍ・ピッチリッロ氏のこと（２）

岡 田 真 弓

「『パブリック考古学』への視線」というテーマでＭ・ピッチリッロ氏のことを偲ぶコーナーの第２回目です。前回はピッチリッロ氏及びフランシスコ修道会聖書研究所の組織の紹介でした。今回はピッチリッロ氏が目指した地域社会との架け橋になる考古学の土台部分であるフランシスコ修道会聖書研究所が行った考古学調査とその調査から検出された遺物の公開についてご紹介したいと思います。

フランシスコ修道会聖書研究所（Studium Biblicum Franciscanum 以下ＳＢＦ）及びフランシスコ修道会考古学研究所（Franciscan Archaeological Institute 以下ＦＡＩ）の調査研究目的は、ローマ時代から十字軍時代にかけてのパレスチナ地方におけるキリスト教の歴史の痕跡を見つけ出すことである。その活動は現在のイスラエル国とヨルダン王国を跨いで活発に行われている。イスラエルでは受胎告知教会を中心としたナザレ遺跡を始めとして、カペルナウム遺跡、ヘロディオン遺跡、マグダラ遺跡、カナ遺跡、ガリラヤ湖周辺の調査等を行っている（イスラエル国での主要な調査地については次頁の表参照）。ヨルダンでは 1973 年からネボ山発掘を皮切りに、マダバ遺跡、ウンム・アル・ラサス遺跡、ネボ山の聖モーセ記念教会堂遺跡及び周辺遺跡へと拡大している。

フランシスコ修道会が考古学調査に乗り出したき

っかけは1895年にナザレの受胎告知教会の地下洞窟近くで数片のモザイク片を見つけたことから始まる。その後、そのモザイク片が十字軍時代の受胎告知教会の床に敷かれたモザイクの一部であったことが判明し、教会堂の経年的な変化を考古学的手法で追跡できることが分かったのである。勿論、フランシスコ修道会がこの地の足を踏み入れた13世紀から「聖地における聖書記述の確認」といった行為はなされてきた。しかし、体系的な「調査」が始まった背景には、当時の西欧諸国において聖書の舞台となったパレスチナの地に対する文化的興味が高まっており、西欧諸国の考古学者やその他の修道会が当地へ調査に来ていたことが挙げられる。その後20世紀初頭にＳＢＦが誕生し、今日の活動につながっていることは前回ご紹介したとおりである。ＦＡＩの始まりは、ＳＢＦのＳ・サリール神父を中心とした修道士たちが1933年にネボ山山頂に残るモーセ記念教会堂の発掘調査を開始したことから始まる。その後、当時ネボ山頂上一体を所有していたベドウィンから購入した地域が、現在の研究所及び教会堂の敷地となっている。

ＳＢＦが行う調査の強みは、一般の調査団が中に入りにくい教会堂の敷地内で調査できることである。ユダヤ・サマリア地方にひっそりと佇む修道院や聖人の岩窟墓、また教会堂の聖所の調査等は、たとえキリスト教徒であっても聖職者以外に立ち入ることができない場合もある。近年までＳＢＦもＦＡＩも単独で考古学調査を行ってきたが、ＦＡＩはイタリアの大学や欧州連合の調査機関と連携して遺跡の調査や保存を行い始めている。それらの調査結果はＳＢＦが発行している雑誌 *Liber Annus* に掲載されたり、ネット上で公開されている。

次に聖書学的にも歴史学的にも重要な遺跡を発掘調査しているＳＢＦとＦＡＩの調査によって検出された遺物の管理と公開について述べたい。

遺物の管理は永らくフランシスコ修道会が行っている。現在ではイスラエル国及びヨルダン・ハシミテ王国では政府の考古局と協力体制にある。しかし、

イスラエル国でのフランシスコ会による発掘調査

（調査年、調査責任者、調査対象）

カペルナウム〔クファルナウム〕
1921　G. オルファリ（ビザンツ時代八角堂教会堂遺構**調査**）
1944　B. バガッティ（同上）
1968　V. コルボ、S. ロフリーダ（イタリア政府援助により遺跡全域**調査**）
2000-03　S. ロフリーダ（住居址**調査**）
タブハ〔タブハ〕
1935　B. バガッティ、S. サリール（4世紀末から5世紀初頭の教会堂遺構）
1968　S. ロフリーダ（同上）
1970　S. ロフリーダ（パンと魚の教会周辺調査）
ベアティチュード山
1936　B. バガッティ（現在の教会堂建設前の調査）
アイン・ケリム〔エン・ケレム〕
1938, 1941　B. バガッティ（現・教会堂建設前の調査）
エンムス
1940-41　B. バガッティ（イタリア修道会との合同調査）
ベツレヘム
1948　B. バガッティ（降誕教会周辺の調査）
V. コルボ（羊飼いの野の教会堂遺構**調査**）
1951-52　V. コルボ（羊飼いの野の新修道院建設前の調査）
ベタニア
1949-53　S. サリール
オリーブ山
1953-55　B. バガッティ（主の泣かれた教会堂遺構調査）
1959　V. コルボ（オリーブ山広域にわたる調査）
ベトファゲ
1954　A. バールッツィ
ナザレ
1954-60　B. バガッティ（現在の受胎告知教会建設前の調査）
カルメル山
1960-61　B. バガッティ（十字軍時代の教会堂遺構調査）
聖墳墓教会
1961　V. コルボ（カトリック地区の修復作業および調査）
ヘロディオン
1962-67　V. コルボ（イタリア政府援助による調査）
ガリラヤのカナ
1969, 1997　S. ロフリーダ（現在の教会堂周辺）
タボル山
1920-21　（現在の教会堂建設前調査）
ゲッセマネの園周辺
1905, 1919-20　G. オルファリ（現在の教会堂建設前調査）

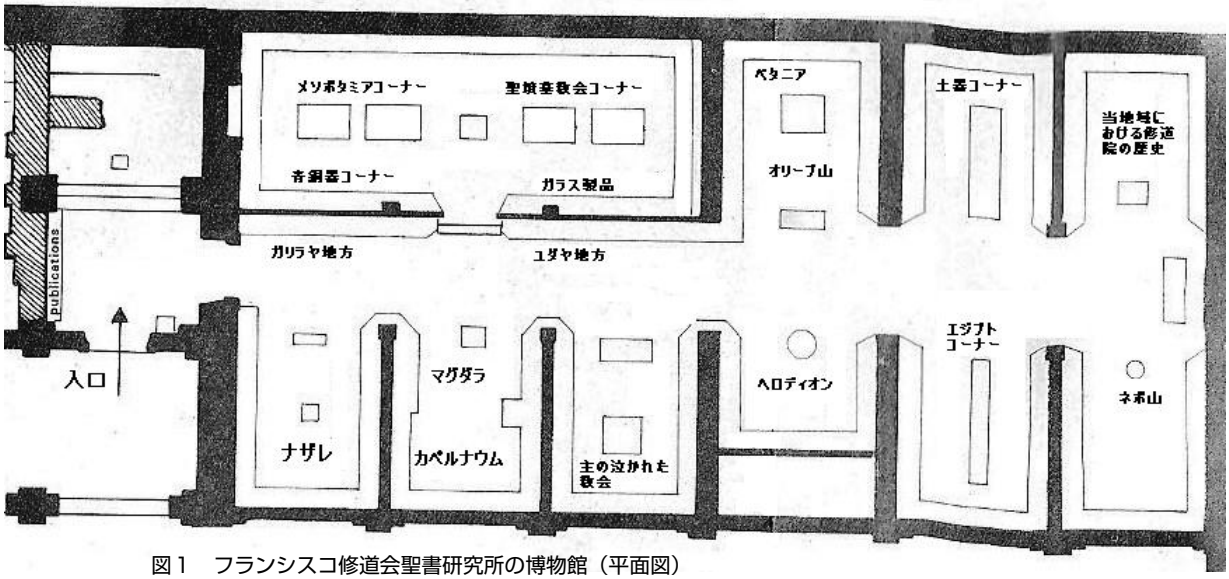


図１　フランシスコ修道会聖書研究所の博物館（平面図）

以前はキリスト教界とイスラエル政府は、教会所有の土地にかかる税などに関して合意が取れずに、長い間緊張状態にあった。特に修道会が所有する敷地内での発掘調査やそこから出土した遺物はつい最近まで正式に考古局に報告していなかったと言う。勿論、一般の人々にも調査結果や検出された遺物の一部が公開されており、例えばイスラエル国の場合には受胎告知教会の地下にある考古学博物館、エルサレムにあるフランシスコ修道会聖書研究所の博物館（図１）、ヨルダン王国の場合にはネボ山にあるモーセの記念教会堂（現在展示用の建物を建設中）、ウンム・アル・ラサス遺跡のビジターセンターに所蔵・展示されている。エルサレムのフランシスコ修道会聖書研究所の博物館は、ヴィア・ドロローサの第２ステーションである鞭打ちの教会堂の敷地内にある。ここの所蔵品はＳＢＦの考古学者によって調査されたゲッセマネの園、アイン・ケリム、ユダヤ地方の修道院群、主の泣かれた教会、ベタニア、カペルナウム、マグダラ、ヘロディオン、ナザレ、ネボ山の遺跡出土遺物だけでなく、シリアやエジプト地域出土の遺物も展示されている。見学は予約制で、修道士が案内してくれる。筆者が訪問した際は、イタリア語の解説で館内は撮影禁止であった。本館での遺物の保管状態はお世辞にも良好とはいえないが、主にローマ時代から十字軍時代にかけてのキリスト教を中心とした社会を物質文化的に知ることができるという点で、特筆に価する。勿論、イスラエルのほかの博物館でもローマ時代から十字軍時代にかけてのキリスト教の歴史に関わる展示は行われているが、この地のキリスト教の歴史の潮流の中心となってきた場所に関する考古学的調査を行ってきたのはフランシスコ修道会などの修道士たちであり、そうした研究の蓄積はイスラエルのその他の研究機関によるものを遥かに凌ぐ。

余談ではあるが、筆者が以前から気になっていた

質問をピッチリッロ氏に尋ねてみた。それはキリスト教にとって歴史的に重要な遺跡の調査を行っているフランシスコ修道会が、バチカン市国にあるローマ教皇庁キリスト教考古学研究所やバチカン市内にパレスチナ地方出土の遺物を持ち込むことはあるかという質問であった。バチカン市国の研究機関とイスラエル国、ヨルダン王国にあるフランシスコ修道会の研究所での研究連携はなく、出土品は歴史をはぐくんだ正にその地になければならないし、修道会領地でない場所からの出土品は行政から指定された場所に保管しているとの回答が返ってきた。

今回はＳＢＦとＦＡＩが行った調査とその調査から検出された遺物の一般公開について駆け足でまとめてみた。こうした活動はイスラエル政府が管理してきた当地域の考古学調査とは、異なる歴史を映し出してきたと言えるのではないだろうか。また、治安上調査が困難なガザ地区等で教会堂遺構の調査・保存を行っているという点でも、当地域の歴史の歴史解釈の活動においてイスラエル政府がカバーしていない部分をＳＢＦやＦＡＩが担っていると言うこともできよう。　（慶應義塾大学後期博士課程）

□ 第 12 回イスラエル考古学研究会・報告 □

2009 年 12 月 23 日（水）

於 : 八王子・北野南部会館

牧野久実 「エン・ゲヴのペルシャ～ヘレニズム時代の考え方」

佐藤育子 「フェニキア・カルタゴ史研究の現状 ――国際学会とチュニジア踏査に参加して」

エン・ゲヴ英文報告書作成の進捗状況 について

◇◇　お知らせ　◇◇

ラキシュ、メギドの発掘などで知られるＤ・ウシーシュキン教授（テル・アヴィヴ大学）の公開講演会が５月の連休明けに立教大学にて開かれます。関西地区での講演も計画されています。詳細については立教大学月本研究室あるいは下記メールアドレスまでお問い合わせください。

編 集 後 記

○前 12 世紀に地中海世界を維持していたミケーネ社会が総崩れしてゆく。これを海の民による破壊と見る見方もあるが、逆にミケーネ社会の崩壊が大量の難民を生み出し海の民の大移動を引き起こしたとする見方もある。正反対の説があるのは、実相が分かっていないことを皮肉にも示している。しかし崩壊する時はこういうものかもしれない。これという大きな原因がないのに、１つ１つと崩れ、雪崩現象が起きる。

○現代社会は日本も世界も総崩れの様相を呈している。経済も政治も社会もこれまでのシステムや体制は雪崩現象を起こしているように思える。この時代に遭遇したことは不運なのか幸運なのか。　（Y.T）

○今号は期せずしてエンゲヴ特集となりました。レヘシュの報告は次の発掘前に。イスラエル考古学のニュースも続けます。　（Mi.）

目　次

2009 年度エン・ゲヴ発掘 報告　間舎 裕生　1

エン・ゲヴ遺跡保存公園計画
～調査結果と設計提案（2009 年夏）～　河合 雄介 他　3

エン・ゲヴ
ペルシャ時代からヘレニズム時代の考え方　牧野 久実　7

Ｍ・ピッチリッロ氏のこと（2）　岡田 真弓　10

お知らせ・編 集 後 記　13

イスラエル考古学研究会 ニュースレター　No. 9

2010 年 3 月 12 日

編　集： 巽 善信　　宮崎 修二

発　行： イスラエル考古学研究会

〒 632-8510

奈良県天理市杣之内町 1050 番地

天理大学文学部　考古学・民俗学共同研究室内

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256　イスラエル考古学研究会